

# 縦断的発話データに基づく対のある 自他動詞の習得研究

— 「きまる-きめる」「かわる-かえる」の使用状況から —

中 石 ゆうこ<sup>1</sup>  
(2004年9月30日受理)

A Study on the Acquisition of Japanese Transitive - Intransitive Verb Pairs Based on a Longitudinal Corpus:  
The use of "KIMARU-KIMERU", "KAWARU-KAERU"

Yuko Nakaishi

In this paper, the longitudinal speech data of six learners of Japanese were analyzed to investigate their uses of transitive-intransitive verb pairs.

The data showed:

- 1) Uses of transitive and intransitive verbs were similar between Chinese and Korean learners. Most of the learners used one verb of the transitive - intransitive pair at the early stage of learning.
- 2) Learners used either the transitive or the intransitive verb of the pair, in almost similar proportion.

The results suggest that the use of transitive-intransitive verb pairs depends on its general use frequency rather than its grammatical category.

Key words : transitive-intransitive verb pairs, longitudinal study, Sakoda corpus

キーワード：対のある自他動詞，縦断的研究，サコダコーパス

## 第1節 はじめに

「わる-われる」の「war-」，「こわす-こわれる」の「kowa-」のように語根 (Root) を共有する形態的な対を持つ「対のある自動詞」，「対のある他動詞」<sup>2</sup> (以下，対のある自他動詞) は学習者にとって使い分けが難しいと言われる (長沢1995, 小林1996, 小林・直井1996, 市川1997)。

現在までに，日本語の対のある自他動詞に関する習得研究はいくつか行われている。しかし，これまでの研究では，学習者の視点を取り入れた学習者独自の言

語 (中間言語) の様相の解明を目指した研究は少なく，記述的文法研究によって予測された目標言語の困難点を検証する研究が大半を占めている。

習得研究の成立は，Corder (1967) が誤用の有用性，体系性を指摘したことを発端にする。その後，Selinker (1972) によって学習者言語を目標言語でもなく，第一言語でもない，独自の言語とする「中間言語 (interlanguage)」という概念が提唱された。1970年代以降，この体系だった一言語の様相の記述を行うことが学習者の言語発達に即した言語教育への貢献に繋がるという確信から，多くの中間言語研究 (第二言語習得研究) が行われるようになった。

そして現在では，第二言語習得研究は，第二言語学習者の産出した言語資料の研究，それぞれの過程の変化自体の研究ではなく，そこに現れた学習者の持つ言語体系を探る研究であることが示されている (迫田1998:6)。

<sup>1</sup>本研究は，課程博士候補論文を構成する論文の一部として以下の審査委員により審査を受けた。

審査委員：迫田久美子 (主任指導教員)，小篠敏明，  
縫部義憲，水町伊佐男，白川博之

この枠組みで考えると、記述的文法研究で明らかにされた母語話者による自他動詞の使用状況に学習者の使用が符合するかどうかで正誤を決める習得研究ではなく、学習者に内在する仮説の総体としての学習者独自の言語体系が存在することを認め、その様相を様々なデータをもとに探ることが必要になる。

## 第2節 先行研究

### 2-1. 運用データを用いた習得研究の必要性

日本語の対のある自他動詞の習得に関して、守屋(1994)、小林(1996)、小林・直井(1996)では、文完成法、多肢選択法を用いた調査結果から「自動詞の使用が困難である」と報告されている。また、小林(1996)、小林・直井(1996)では、「あく」、「あける」、「あけられる」を用いた多肢選択テストの結果から、学習者にとって自動詞表現の中でも特に働きかけの結果の状態を表す自動詞の使用が難しいという指摘がなされている。

しかし、選択肢や直前の助詞が解答の手がかりとなる調査資料に基づく結果と、実際の運用は区別しなければならない<sup>3</sup>。現在までの対のある自他動詞に関する習得研究では、運用における使用状況を分析した研究は存在しない。

### 2-2. 自動詞、他動詞の語彙的側面に着目した習得研究の必要性

現在までの研究では、調査で扱われた動詞の語彙的な違いは興味の対象外であり、どのような自他動詞対を調査項目にしても同様に「自動詞、他動詞の習得」とされている。

しかし、対のある自他動詞は文法項目であると同時に、それに含まれるそれぞれの動詞が独立した語として機能するという複数層の構造をなしている。このことから、対のある自他動詞の習得研究は、文法項目の習得研究という側面と同時に、語彙の習得研究という側面を持ち、その習得の様相は複雑なものであると考えられる。自動詞、他動詞の語彙的側面に着目した習得研究をすることが必要である。

## 第3節 これまでの研究の経緯

中石(2004)では、横断的な発話データとしてKYコーパス<sup>4</sup>を分析した。自他動詞対の使用状況を分析した結果、自他動詞対の使用には、活用形によって自他動詞の使用が固定している場合、対の一方のみが使用される場合があることが示唆された。

そこで、以上の結果を確認するために、文完成法によるタスクを行い、自他動詞対の使用に規則性が見られるかどうかを明らかにした<sup>5</sup>。対のある自他動詞の語彙的側面に着目し、タスクで用いた動詞対は、KYコーパスにおいて学習者の発話に出現することが多く、誤用の多かった「つくーつける」、「きまるーきめる」、「かわるーかえる」とした。

その結果、学習者の対のある自他動詞の使用パターンは、以下の4つのパターンに分類できることが明らかになった。各例は、一人の学習者が記入した解答である。

- ①テ形、辞書形、ナイ形いずれの活用形においても、自動詞のみを使用している場合  
(例) ペンをえんぴつにかわる。  
お金をかわって財布に入れます。  
時間はかわらないんです。
- ②テ形、辞書形、ナイ形いずれの活用形においても、他動詞のみを使用している場合  
(例) ここを押すと、ラジオがつけるんです。  
電気をつけてください。  
テレビがつけない。
- ③活用形によって使用が自動詞形、あるいは他動詞形のいずれかに固定している場合  
(例) 辞書形(自動詞形のみ)  
行くところをきまるんです。  
時間をきまる。  
テ形(他動詞形のみ)  
食べ物をきめて、先生に言います。  
時間をきめてください。  
ナイ形(自動詞形のみ)  
食べ物がきまらない。  
行くところをきまらないでください。
- ④少なくとも1つの活用形において自動詞形、他動詞形のいずれも使用している場合  
(例) 電気がつけない。  
テレビがつかない。

以上の結果を受けて本研究では、文完成法によるタスクで示された使用パターンが実際の運用においても表れるのか、表れるのであれば、それはどのように推移するのかを明らかにしたい。本研究では、これまでの研究からの流れでひきつづき、動詞対「つくーつける」、「きまるーきめる」、「かわるーかえる」に着目して、縦断的データを用いた個人内の使用パターンを分析する。

## 第4節 縦断的発話データの分析

### 4-1. サコダコーパス

本研究では、縦断的発話データとしてサコダコーパスを用いる。サコダコーパスとは、日本国内の教室環境で学ぶ日本語学習者6名（中国語母語話者3名、韓国語母語話者3名）の対話の文字化資料（合計45時間）である。全体の資料収集期間は3年間で、その間約4ヶ月毎に1時間ずつ、8回（但し①期から②期の間は8ヶ月）の対話が行われた<sup>6</sup>。

各学習者の個人識別記号は、中国語母語話者RY, SH, LL, 韓国語母語話者CH, TN, YN, である<sup>7</sup>。なお、対話の相手は一貫して一人の日本語母語話者NSである。

資料収集時期と、各学習者の日本語の学習期間、各回の話題は以下のとおりである（迫田1998）。

- ①1991年7・8月  
（日本語学習期間約3-4ヶ月）  
「小・中学校の先生の思い出」
- ②1992年3・4月  
（日本語学習期間約11-12ヶ月）  
「留学1年間を振り返って」
- ③1992年7・8月  
（日本語学習期間約15-16ヶ月）  
「私の日本人の友達」
- ④1992年11・12月  
（日本語学習期間約19-20ヶ月）  
「私の学校生活」
- ⑤1993年3・4月  
（日本語学習期間約23-24ヶ月）  
「日本人について」
- ⑥1993年7・8月  
（日本語学習期間約27-28ヶ月）  
「休暇の過ごし方」
- ⑦1993年11・12月  
（日本語学習期間約31-32ヶ月）  
「日本の衣食住について」
- ⑧1994年3・4月  
（日本語学習期間約35-36ヶ月）  
「日本での3年間を振り返って」

### 4-2. 分析の方法

KYコーパスにおいて学習者の発話に出現することが多く、誤用の多かった「つく」「つける」「きまる」「きめる」「かわる」「かえる」の使用を全て抽出し、学習者毎に使用した動詞形を分析した。

### 4-3. 学習者別の使用傾向

「つく」「つける」「きまる」「きめる」「かわる」「かえる」の使用を抽出した結果、「きまる—きめる」「かわる—かえる」の使用は比較的資料全体に渡って見られた。一方、「つく」「つける」の使用は、「気をつけて」「気がついた」「けちをつける」などの慣用句での使用が多かったため、分析の対象から除外することにした。

以下では、「きまる」「きめる」「かわる」「かえる」の使用を、時系列に沿って学習者毎に整理し、その推移を示したい。以下の表1から表12では一貫して、表中の数字は正用、（ ）内の数字は対のもう一方が適切な文脈で、異なる一方を使用した誤用を表す。例えば「きまる」で（ ）内に数字が記入されている場合は、もう一方の動詞「きめる」を用いるべき文脈に「きまる」が出現したことを表す。

#### 4-3-1. 「きまる」「きめる」の使用

##### 4-3-1-1. RY（中国語母語話者）の場合

以下の表1は、各期のRYの発話に出現した「きまる」「きめる」を全て抜きだし、活用毎に整理したものである。

表1. RYの「きまる」「きめる」の使用

活用形	形式	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧
タ形	きめたら			1					
テ形	きめてない	2		1	2		2		
ナイ形	きめない				(1)				
マス形	きめました きめます			1	1				
辞書形	きめること		1	5(1)			2		
タ形	きまった きまったんです きまったんだから		不明1						1 2
テ形	きまってる							2	
ナイ形	きまらなければなら ない								(1)
辞書形	きまる						(1)		

他動詞形は①期から出現し、③期、④期に辞書形、ナイ形の「きまる」が使えずに、「きめる」を用いている。一方、自動詞形は⑥期以降に出現し、⑥期では、辞書形で他動詞形（正用）と自動詞形（誤用）が使用されている。⑦期以降は、自動詞形のみ出現し、⑧期に、ナイ形の「きめなければならなければ」が使えずに、「きまらなければ」を用いている。

##### 4-3-1-2. LL（韓国語母語話者）の場合

以下の表2は、各期のLLの発話に出現した「きまる」「きめる」である。

他動詞形は①期から出現し、自動詞形は④期以降に出現する。⑦期以降は自動詞形のみ出現し、⑧期に

表2. LLの「きまる」「きめる」の推移

活用形	形式	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧
タ形	自分きめたのこと		欠損		1				
テ形	きめてない	1							
ナイ形	きめない					1			
マス形	きめました	1							
	きめたい						1		
辞書形	自分きめるの	2							
可能形	きめられない						1		
タ形	きまったから				1				
	きまったんですから								1
	自分きめ、きまたこと								(1)
テ形	きまってんですけど							1	

は、「自分きめ、きまたこと」のように、他動詞を自動詞に自己修正して使用した誤用がある。

④期には「きめた」という形の使用ができており、④、⑧期には、正しく「きまった」を使用している箇所があることから、④期ではタ形の自動詞形、他動詞形の問題はなかったものの、⑧期に至ると、使用が抑えている可能性がある。

4-3-1-3. SH (中国語母語話者) の場合

以下の表3は、各期のSHの発話に出現した「きまる」「きめる」である。

表3. SHの「きまる」「きめる」の推移

活用形	形式	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧
タ形	きめた		欠損	4		1			
	きめたから						1		
	きめたけど							1	
	きめたこと				2				
	きめたら				1			(1)	
テ形	きめて				1			2	3
	きめてない		1			(1)	1	(1)	
	きめてます			(1)					
マス形	きめます		1		1				

④期、⑤期、⑦期にテ形の自動詞を用いるべき文脈で他動詞を使用している箇所がある。「きめてない」という形式に関しては、②期、⑤期、⑥期で一定して、「まだ決めてない」を使用をしている。SHは一貫して、自動詞形は出現しなかった。

4-3-1-4. CH (韓国語母語話者) の場合

以下の表4は、各期のCHの発話に出現した「きまる」「きめる」である。

表4. CHの「きまる」「きめる」の推移

活用形	形式	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧
マス形	きめちゃって		欠損						1
辞書形	きめるんですよ								1

「きまる」「きめる」の使用は少なく、他動詞形が、⑧期に2回出現するのみである。

4-3-1-5. TN (韓国語母語話者) の場合

以下の表5は、各期のTNの発話に出現した「きまる」「きめる」である。他動詞形は③期から出現するが、自動詞形は一貫して出現しない。③期、⑥期、⑧期に自動詞を用いるべき文脈で他動詞を使用している箇所がある。

表5. TNの「きまる」「きめる」の推移

活用形	形式	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧
タ形	きめた					1	(1)		
	きめたから							1	
テ形	きめて					1	2		(1)
	きめている								
	きめてない						(1)		
マス形	きめませんから			(1)					
辞書形	きめるかと					1			

⑧期では、TNの発話「(スロットでは、いつ出るかという) パターンが決めているんですね。」に対して、NSが誰が決めているのかを確認すると、「わかりません」と答えている。このことから、TNは、この発話では意図的に他動詞「決める」を選択して使っているわけではないと考えられる。

4-3-1-6. YN (韓国語母語話者) の場合

以下の表6は、各期のYNの発話に出現した「きまる」「きめる」である。他動詞形は②期から出現するが、自動詞形は⑧期に初めて出現する。⑥期、⑦期に自動詞を用いるべき文脈で他動詞を使用している箇所がある。

表6. YNの「きまる」「きめる」の推移

活用形	形式	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧
テ形	きめて					1		1	
	きめてある						(1)		
	きめている						(2)	(1)	
	きめてなかった				2				
	きめてます						(2)		
タ形	きまったら								1

YNの他動詞形は、いずれもテ形である。一方、⑧期に出現する自動詞形はタ形であり、活用形によって自動詞の使用が固定している可能性がある。

4-3-2. 「かわる」「かえる」の使用

4-3-2-1. RY (中国語母語話者) の場合

以下の表7は、各期のRYの発話に出現した「かわる」「かえる」である。自動詞形は①期から出現するものの、他動詞形は一貫して出現しない。しかし、他動詞を用いるべき文脈で自動詞を使用している箇所は

ないことから、偶然、データに他動詞を用いるべき文脈がなかったとも考えられる。

表7. RYの「かわる」「かえる」の推移

活用形	形式	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧
タ形	かわっただから								1
	かわった	1							1
	かわったこと								1
	かわったところ							1	
	かわったほう								1
テ形	かわってきいたの						1		
	かわって来た						1		
	かわってみたい			1					
ナイ形	かわらない	1							1
マス形	かわりたい				1				
	かわりました							1	
	かわります					2			
辞書形	かわる	1							
可能動詞	かわれません					1			

発話で「洋服を取り替える」という文脈では、LLは「チェンジ、チェンジ」という発話をしており、NSの「変えるのね」という確認に「はい」と答えている。つまり、LLは①期には「かわる」は使用できるが、「かえる」は使用できない可能性がある。なお、他動詞形は①期と⑧期に一回ずつ出現するが、これらの「変える」は、前後の文脈からは、①期では「書きちゃった」の活用の誤用として「かえちゃった」、⑧期では、「変えるか」ではなく「帰るか」のつもりで発話している可能性がある。

4-3-2-3. SH (中国語母語話者) の場合

以下の表9は、各期SHの発話に出現した「かわる」「かえる」である。自動詞形も他動詞形も③期から出現する。⑤期、⑥期、⑦期に他動詞を用いるべき文脈で自動詞を使用している箇所がある。

4-3-2-2. LL (中国語母語話者) の場合

以下の表8は、各期のLLの発話に出現した「かわる」「かえる」である。

表8. LLの「かわる」「かえる」の推移

活用形	形式	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧
タ形	かわった		欠損						
	かわったほう		2		1				
	かわったら	1							
	かわったんです							1	
テ形	かわって					1		1, 不明	
ナイ形	かわらないけ(れ)ど(も)				1	3		3	
	かわらないし				1	2			1
	かわらないです						1		1
マス形	かわりました	2							
	かわる			2	1			不明	
	かわるけど					1			
辞書形	かわる			2	1			不明	
	かわるけど					1			
	かわるだから								1
	かわるの					1			
	かわるはず			1					
テ形?	かえちゃった(書いてあった?)	不明							
辞書形?	かえるか(帰るか?)								不明

自動詞形は①期から出現する。他動詞を用いるべき文脈で自動詞を使用している箇所はなく、偶然、データに他動詞を用いるべき文脈がなかったとも考えられる。しかし、①期では自動詞形は、「変わったらもう」、「人生の変わるの、少し変わりました」、「少し変わりました」という3回の使用があるが、一方、同じ回の

表9. SHの「かわる」「かえる」の推移

活用形	形式	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧
タ形	かわった		欠損			1			
	かわったかもしれない				1				
	かわったでしょ								
	かわったんです						1		
テ形	かわって						1	(2)	
	かわって来た							3	3
	かわって来て							1	
	かわってほしい								1
ナイ形	かわらない			1		(1)	4	3(2)	
マス形	かわり、				不明				
	かわりました				4	1		1	
	かわります			1	1	(3)	(1)		
辞書形	かわるかもしれない			1					1
タ形	かえた					1			
テ形	かえて			1					

⑤期では、タ形で自動詞形、他動詞形とも正用が見られたが、ナイ形、マス形では他動詞形を用いる文脈で自動詞形を過剰に使用している。⑦期には、③期で使用できていたテ形の他動詞形が使用されずに、自動詞形が過剰に使用されている。ナイ形の自動詞形の過剰使用も引き続き表れた。

4-3-2-4. CH (韓国語母語話者) の場合

次ページの表10は、各期CHの発話に出現した「かわる」「かえる」である。自動詞形も他動詞形も③期から出現し、③期では「かえて」「かわって」の両方が使用されている。他動詞を用いるべき文脈で自動詞を使用している箇所はない。テ形以外の活用形では、出現した動詞が自他動詞の一方に限られている。

表10. CHの「かわる」「かえる」の推移

活用形	形式	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧
タ形	かわったもんだから				1				
	かわったら		欠損		2				
テ形	かわって			1					
	かわってない							2	
	かわってません								1
	かわってる						3		2
ナイ形	かわらない			1					
辞書形	かわる			1					
	かわるでしょ			1					
	かわるのは			1					
	かわるらしい			1					
	かわるわけ			1					
テ形	かえて			1			1	不明1	
マス形	かえたい								1
意向形	かえよっかな			1					
可能形	かえれないでしょう						1		

表12. YNの「かわる」「かえる」の推移

活用形	形式	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧
タ形	かわった							1	1
	かわったかもしれない			1					
	かわったんだって								1
テ形	かわっているかな			1					
ナイ形	かわらないんです				1				
マス形	かわりました		(1)						3
	かわります		1						
	かわりません		1						
辞書形	かわる								1
	かわるもんだな一						1		
	かわるんでしょ			1					
意向形	かわろうと								不明1
タ形	かえた		(1)不明1						
テ形	かえて(不明)		不明1						
辞書形	かえる								(1)
	かえるように								(1)

4-3-2-5. TN (韓国語母語話者) の場合

以下の表11は、各期TNの発話に出現した「かわる」「かえる」である。

自動詞形は④期から出現するものの、他動詞形は③期に一回だけ出現するのみである。この使用は前後の文脈から、「変えるか」ではなく「帰るか」のつもりで発話している可能性がある。他動詞を用いるべき文脈で自動詞を使用している箇所はない。

表11. TNの「かわる」「かえる」の推移

活用形	形式	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧
タ形	かわったかな					1			
	かわったですね					1			
	かわったほうがいい				1				
	かわったら							1	
	かわったんですね								1
テ形	かわって				1	1			
	かわってから				1				
	かわってくる				1				
	かわってない							1	
ナイ形	かわらん							1	
マス形	かわります				1				
辞書形	かわる、ほうがいい				1				
	かわるかも							1	
	かわるから					1			
	かわるようになる				1				
	かわるんですね								1
辞書形	かえるか(帰るか?)				不明1				

4-3-2-6. YN (韓国語母語話者) の場合

以下の表12は、各期YNの発話に出現した「かわる」「かえる」である。自動詞形も他動詞形も②期から出現する。②にマス形他動詞を用いるべき文脈で自動詞を使用している箇所がある。一方、②期、⑧期に、タ形、辞書形の自動詞を用いるべき文脈で他動詞を使用している箇所がある。

⑧期には、「変えるようにしました」を使用している箇所、NSに「かえる、韓国に帰るじゃなくて」

と確認され、「かえるじゃ、変わる」と自己修正している。このことから、⑧期では、「変える」の使用がされ始めているが、まだ定着していない可能性がある。この発話は、テープのA面からB面に切り替わった直後のものであり、これ以上文脈などからは分析できなかった。

4-4. 全体的な使用傾向

以上、学習時間の経過に沿って自他動詞対「きまる一きめる」、「かわる一かえる」の使用の推移を、学習者別に分析した。ここでは、全体的な使用の傾向をまとめたい。

「きまる一きめる」の場合、6名の学習者で「きめる」のみの使用だった学習者が3名(SH, CH, TN)、「きめる」のみの使用から、「きまる」、「きめる」の使用に移行が見られた学習者が3名(RY, LL, YN)であった。移行の時期は、一致しなかった。このことから、「きまる一きめる」については、以下のようにまとめることができる。

(1)学習期間の短い時期には、「きまる一きめる」では、いくつかの活用形で他動詞「きめる」が使用されることが多い。学習期間が長くなると、自動詞「きまる」の使用が少しずつ見られるようになる。

次に「かわる一かえる」の場合は、6名の学習者のうち「かわる」のみの使用であった学習者が3名(RY, LL, TN)、②期あるいは③期(学習開始から11ヶ月から16ヶ月)以降、「かわる」、「かえる」の両方の使用が見られる学習者が3名(SH, CH, YN)であった。このことから、「かわる一かえる」については、以下のようにまとめることができる。

(2)「かわる—かえる」では、学習期間に関係なく、学習者によって、いずれの活用形でも自動詞「かわる」が使用される場合と、自動詞「かわる」と他動詞「かえる」の使用が併存する場合が見られる。

なお、「かわる」のみの使用だった学習者3名(RY, LL, TN)の発話には、いずれも「かえる」を用いるべき文脈がない。学習者が「かえる」の使用が必要になる話題を回避しているのか、あるいは実際の使用においては、どのような話題でも「かわる」で発話すれば誤用にならない場合が多いのかは明らかではない。

以上の縦断的発話コーパス資料の分析の結果から、「きまる—きめる」、「かわる—かえる」の使用の推移は、以下のような過程を辿ると考えられる。

「きまる—きめる」の推移

きめる(他) > { きめる(他)  
きまる(自)

「かわる—かえる」の推移

かわる(自) ≥ { かわる(自)  
かえる(他)

先行研究における「自動詞の使用が難しい」(守屋1994, 小林1996, 小林・直井1996)という指摘から、学習者の自他動詞の使用は、他動詞の過剰使用から自動詞の使用もできるようになり、使い分けが行われるようになる、という推移が見られると予想された。しかし、本研究では対の片方しか出現しない場合や、「かわる—かえる」の使用に見られたように、自動詞の使用が他動詞の使用に先行する場合が見られた。

以上の結果から、他動詞だから早くから使用される、自動詞だから遅くまで使用されない、という文法的な動詞のカテゴリーが直接、使用されやすさに関わるのではなく、語によって使用の推移も異なる可能性が示された。

第5節 今後の課題

本研究では、縦断的発話データを用いて、これまでの研究において示された使用パターンの確認と、その推移の観察を行った。活用形によって使用が自動詞形、あるいは他動詞形のいずれかに固定している場合に関しては、本研究のデータが自由度の高い発話データであるという性質上、テープに収録された文脈の偶然性は排除できないことから、十分に明らかにすることができなかった。しかしながら、本研究を通して対のある自他動詞のうち、一方のみを使用するという使

用パターンが表れること、その使用パターンが動詞対によって異なることが示された。これまでの研究で欠けていた、運用データを観察することの必要性、および自他動詞の語彙的側面を重視した習得研究の必要性が示されたことが本研究の意義である。

今回の調査では、データの制約もあって、二つの自他動詞対の使用しか詳しく分析することができなかったが、今後は、より多くの自他動詞対の使用の分析を行い、対のある自他動詞の習得における語彙的多様性が、さまざまな属性を持つ学習者で一般化できるものなのか明らかにすることが必要である。

さらに今後は、何が先行して使用される動詞対の一方を決定づけるのか、その要因を明らかにする必要がある。外的要因の一つとして、学習者の使用した教科書の影響が考えられる。今回分析したサコダコーパスに登場する6名の学習者は、同一の教育機関において同一の初級教科書『日本語初歩』を使用している。しかしながら、この教科書には今回分析した動詞語彙「きまる」「きめる」「かわる」「かえる」のいずれも出現せず、教科書の影響については分析できなかった。

もう一つの外的要因として周囲からのインプットにおける各動詞の使用頻度が関わると考えられる。以下の表13は、検索エンジンGoogle (<http://www.google.co.jp/>)を用いて検索した「きまる」、「きめる」、「かわる」、「かえる」のテ形、タ形、辞書形、ナイ形、マス形の各動詞形を含むサイト数(2004年7月11日現在)と国立国語研究所(1997)『テレビ放送の語彙調査II』における動詞の頻出順位を表したものである。

表13.出現サイト数とテレビ番組における頻出順位

動詞	出現サイト数 (インターネット)	頻出順位 (テレビ番組)
きまる	3,073,000	253位
きめる	3,929,800	166位
かわる	8,183,000	184位
かえる	4,607,000	312位

表13から、学習者が先行して使用するようになる「きめる」、「かわる」は、もう一方の「きまる」「かえる」より多くのサイトで使用され、テレビ番組にも頻出することが分かった。この結果から、学習者が先行して使用するようになるのは、周囲の環境における自他動詞対の使用が関連する可能性が考えられる。しかしながら、この点に関しては稿を改めて、仮説検証型の研究を行うことが必要になる。この他の自他動詞語彙に関わる要因として、学習者の用いる辞書での扱い、動詞の意味素性、動詞の種類などがある。また、学習者に関わる要因としては、学習者の母語、学習

歴、滞日経験、学習環境などが存在する。今後は、語彙的な習得の順序を決定する要因として、何が大きく関わるのかを明らかにする必要がある。

## 注

- (2) 寺村 (1982) では、共時的に見て、共有の語根 (Root) から派生した自動詞、他動詞を形態的に対をなすと捉え、「相対自動詞」、「相対他動詞」と呼んでいる。本研究の「対のある自動詞」、「対のある他動詞」には、それに加えて、語根 (Root) を共有していないものの初級教科書では自他動詞対として指導される「入る-入れる」も含める。
- (3) Larsen-Freeman & Long (1991) でも言語知識と実際の自由な発話場面における運用とは別個のものとして考えなければならないと指摘されている。
- (4) K Y コーパスには中国語母語話者、韓国語母語話者、英語母語話者各30名ずつのOPI (Oral Proficiency Interview) での発話が文字化して取られている。その30名の内訳は、各母語とも初級5名、中級10名、上級10名、超級5名である (鎌田1999, 山内1999など)。
- (5) 文完成法によるタスクを用いた調査結果に関しては、別稿で論じる。
- (6) LL, SH, CHは②期のデータが欠損している。
- (7) 各学習者の性別、調査時の年齢は次のとおり。中国語母語話者RY (女性, 22-25歳), SH (女性, 25-28歳), LL (女性, 20-23歳), 韓国語母語話者TN (男性, 21-24歳), CH (男性, 18-21歳), YN (女性, 21-24歳)。

## 引用文献

- 市川保子編 (1997) 『日本語誤用辞典』凡人社
- 鎌田修 (1999) 「K Y コーパスと第二言語としての日本語の習得研究」『第2言語としての日本語の習得に関する総合研究』(平成8年度-平成10年度科学研究費補助金 研究成果報告書 基盤研究(A) 課題番号08308019 研究代表者カッケンブッシュ寛子) 227-237.
- 小林典子 (1996) 「相対自動詞による結果・状態の表現-日本語学習者の習得状況-」『文藝言語研究言語篇』29:41-56. 筑波大学文芸・言語学系
- (2001) 「第8章 効果的な練習の方法 うま

く習得してもらうには工夫がある」野田尚史・迫田久美子・渋谷勝己・小林典子編『日本語学習者の文法習得』大修館書店

- 小林典子・直井恵理子 (1996) 「相対自・他動詞の習得は可能か-スペイン語話者の場合-」『筑波大学留学生センター日本語教育論集』11:83-98. 筑波大学留学生センター
- 迫田久美子 (1998) 『中間言語研究-日本語学習者による指示詞コ・ソ・アの習得-』溪水社
- 寺村秀夫 (1982) 『日本語のシンタクスと意味 I』くろしお出版
- 中石ゆうこ (2004) 「日本語の記述的研究から独立した習得研究の必要性-日本語学習者による対のある自他動詞の活用形使用を例として-」『日本語文法』4-2:120-135.
- 長沢房枝 (1995) 「L1, L2, バイリンガルの日本語文法能力」『日本語教育』86:173-189. 日本語教育学会
- 守屋三千代 (1994) 「日本語の自動詞・他動詞の選択条件-習得状況の分析を参考に-」『講座日本語教育』29:151-165. 早稲田大学日本語研究センター
- 山内博之 (1999) 「OPI及びK Y コーパスについて」『第2言語としての日本語の習得に関する総合研究』(平成8年度-平成10年度科学研究費補助金 研究成果報告書 基盤研究(A)(1) 課題番号08308019 研究代表者カッケンブッシュ寛子) 238-245.
- Corder, P. (1967) The significance of learner's errors. *International Review of Applied Linguistics*, 5: 161-169.
- Larsen-Freeman, D. & Long, M. (1991) *An Introduction to Second Language Acquisition Research*. New York: Longman.
- Selinker, L. (1972) Interlanguage. *International Review of Applied Linguistics*, 10,3: 209-230.

## 参考資料

- 国際交流基金 (1981) 『日本語初歩』凡人社
- 国立国語研究所編 (1997) 『テレビ放送の語彙調査 II -語彙表』大日本図書
- (主任指導教員 迫田久美子)